

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名： 谷川 竜一	提出日：平成 25年 1月 28日
東南アジア研究所における職名：特任助教 *右記の該当する職位に○をつけて下さい。(講師・ <input checked="" type="checkbox"/> 助教・助手・ポスドク・博士課程学生・修士課程学生・学部学生)	
派遣先の研究機関等(調査を実施した国名・機関名(日本語で記載)及びカウンターパート名)： 韓国・漢陽大学建築学部 *派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所に○をつけてください。(<input checked="" type="checkbox"/> 大学・研究機関・企業・その他)	
派遣先の研究機関等での職名：客員研究員	
派遣期間： 平成 24年 11月 18日 ~ 平成 25年 1月 16日 (派遣日数： 60 日)	
研究活動等の主な内容(該当する番号に○をつけてください。複数可) <input checked="" type="checkbox"/> ①研究・実験 <input checked="" type="checkbox"/> ②フィールドワーク <input type="checkbox"/> ③セミナー <input type="checkbox"/> ④インターンシップ <input type="checkbox"/> ⑤サマースクール等の講習 <input type="checkbox"/> ⑥学会出席 <input type="checkbox"/> ⑦単位取得等 <input type="checkbox"/> ⑧その他	
研究活動の主な領域(該当する番号に1つ○をつけて下さい。) <input type="checkbox"/> ①人文学 <input type="checkbox"/> ②社会科学 <input type="checkbox"/> ③数物系科学 <input type="checkbox"/> ④化学 <input checked="" type="checkbox"/> ⑤工学 <input type="checkbox"/> ⑥生物学 <input type="checkbox"/> ⑦農学 <input type="checkbox"/> ⑧医歯薬学 <input type="checkbox"/> ⑨総合領域 <input type="checkbox"/> ⑩複合新領域	
派遣の概要(500~700字程度) <p>戦前の日本植民地下で、朝鮮半島の開発を行った日室(後のチッソ)の建設技術者たちは東南アジアの諸調査を行なう中で敗戦を迎えた。しかし計画は途切れず、日本工営などの技術陣として戦後ふたたび結集し、東南アジアの賠償工事やそれに続くODA開発へ向かった。本研究は、彼らが行った日本の戦前の東アジア・東南アジア開発経験のうち、特に朝鮮半島における彼らの建設活動を明らかにすることで、戦後の東南アジア開発に連続したと考えられるインフラの概要や技術的蓄積を明らかにすることを目的としている。</p> <p>この中で、日本の最初期の東アジア巨大ダム開発である赴戦江水力発電所の電気を利用した興南の窒素肥料工場に関して着目した。この際、賠償工事の最初期の事例であるミャンマーのバレーチャンダム開発などは、肥料製造を念頭にいたダム開発であり、水力発電用のダム開発だけではなく、その電気をもちいた産業施設までも考慮に入れる必要がある。従って、その開発の嚆矢としての赴戦江ダム開発と興南工場の戦前・戦後を考察し、戦前期の植民地最大級の発電施設と肥料工場の建設経験やその電力を用いた開発が、戦後にどのように東アジアで継承され、他方で東南アジアへ転用されたのかという点に注目した。そして韓国に残る日本の植民地開発の資料を精査すると同時に、戦後東南アジア開発に関わった技術者たちが、強い関心を抱いていた1950年代の朝鮮戦争期の興南工場やその後の韓国開発に関する資料を、図書館、史料館で調査し、韓国において同様の視点から産業施設を研究している研究者たちとの情報交換を推し進めることとした。</p>	
事業に係る研究成果(500~700字程度) <p>1. 近年韓国国内で整理が進んでいる植民地時代の各種図面、地図、写真等を、ソウル市立博物館ほかで収集することができた。また、漢陽大学ほかの研究者たちのアドバイスを受けながら、ソウル市図書館などを中心に資料収集を行った。それにより独立後の韓国における電力開発史関連資料などを収集できたと同時に、独立後の開発の中でも、日本が関与した電化地下鉄建設等を始めた都市開発史に関連する技術援助資料などを収集できた。</p> <p>2. フィールドワークに関しては、巨大開発の影響を単に経済や政治的な観点だけで論じるだけでなく、個々の人々の生活の中で起こった歴史的な細かな変化を、建築や生業の変化の中から調べるために、地方都市や漁村などまで調査した。特に群山は植民地時代においては韓国の穀倉地帯の中心都市として位置づけられ、日本人・熊本利平などが経営する大農場が開発されたが、その農場跡などの訪れ、残る建築などを調査することができた。また、魚肥などを含む水産業の街として栄えた東海岸の九龍浦、甘浦などでは、漁村の建築調査を行なった。</p> <p>3. 研究交流として、12月に漢陽大学建築学部内にて、研究発表を行ない、約30人程度のオーディエンスと意見交換をすることができた。また、蔚山大学のキムホンギョ講師と共に3日間の共同調査を行ない、上記漁村などを調査すると共に、韓国財閥・現代グループの拠点工業都市である蔚山に関する情報を多く頂いた。さらに京畿大学のアンチャンモ教授とは北朝鮮の平壤、興南等を始めとする都市の近代化に関する資料や研究状況に関して綿密な意見交換をすることができた。特に漢陽大学の受入れ教員である富井教授、韓教授のおかげでこれまでにないほどの多くの研究者と意見交換や、彼らからの資料収集を行うことができた。</p> <p>具体的な成果としてはまとめはじめた段階であり、今回得た情報や資料をもとにさらに調査を継続する予定である。</p>	

